

オリーブの木

No. 50

2013年11月

聖地のこどもを支える会
NPO法人認証10周年
記念特集号



2004年、NPOになって初めての聖地視察旅行。当時の教皇使節ピエトロ・サンビ大司教様に励まされた。



2013年のスタディーツアー。イスラエル人とアラブ人共学のハンド・イン・ハンド(手をとって)学院訪問(エルサレム)。3カ国の若者たちがあたたかく交流。

支援者の皆様、会員の皆様、

「聖地のこどもを支える会」がNPO法人として認証を頂いてから、早や10年が経ちました。皆様のご理解とご支援のおかげで、中東和平のために、「教育」というかたちで支援を行う当法人の小さな活動を何とか続けてこられました。2005年から始めた青少年交流活動も、参加したイスラエル、パレスチナ、日本の若者たちをとおして平和の光をともし続けています。

10年間の大きなご支援に感謝申し上げますとともに、引き続きご協力を賜りますよう、理事長、役員一同、心よりお願い申し上げます。

まもなく年末年始を迎えます。皆様とご家族の上に、クリスマスの恵みが豊かにありますように、そして新しい年が平和に満ちたものでありますようにお祈りいたします。

井上 弘子



NPO法人 **聖地のこどもを支える会**

事務局 〒164-0003 東京都中野区東中野5-8-7-502

TEL & FAX **03-6908-6571**

E-mail : seichi@k.email.ne.jp hiroko@michi-no-kai.com

ホームページ : <http://seichi-no-kodomo.org>

郵便振替 : 00180-4-88173 加入者名 : NPO法人 聖地のこどもを支える会



Accountability
Self-Check 2008

当NPOは、国際協力NGOセンター(JANIC)によるアカウンタビリティ・セルフチェックを受け、基準の4分野(組織運営・事業実施・会計・情報公開)について適正に運営されていると認定されました。

ごあいさつ

理事長 井上弘子

約25年前、「道の会」巡礼者たちのイニシアティブから始まった「聖地のこどもを支える会」が2003年NPO(特定非営利活動法人)として認証されてから、今年で10年目を迎えました。「教育こそ平和への道」との確信から、紛争に苦しむ子どもたちを援助しようと始まった活動は、最初は本当に小さなものでした。おかげさまで、この10年間は毎年平均400人くらいの子どもたちが学校へ通えるようになりました。数年前に始まった「教育里親制度」も現在は10数名の児童を支えています。

活動のもう一つの柱である青少年国際交流プロジェクトは、次世代を担うイスラエル、パレスチナ、

日本の青少年を対象に、交流と対話の機会を与え、平和のために働く人材を育成することを目的としています。「ヨハネ・パウロⅡ世財団」との共催で行っているプロジェクトとスタディー・ツアーは合計12回、これまで参加した若者は3カ国で、延べ250人を越えるでしょう。平和の大切さ、相互の信頼と和解の必要性に目覚めた彼らが、それぞれの場で、どのように、平和の働き人として成長していかれるのでしょうか？

新しい年に向けて、さまざまな活動を充実させると同時に、法人そのものの活動基盤を堅固なものとするために、「認定NPO法人」への申請作業を始めています。

皆様のご指導を重ねてお願い申し上げます。

お祝いのメッセージをいただきました！

NPO 認証10周年にあたって、現エルサレム教皇使節、ジュゼッペ・ラザロット大司教様をはじめ、いろいろな方からお祝いと励ましのメッセージを頂きました。そのいくつかをご紹介します。皆様、本当にありがとうございました。

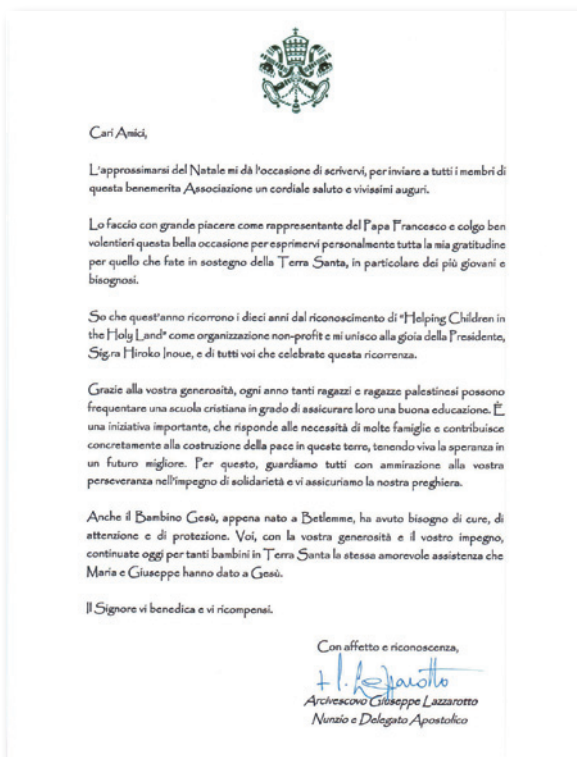
教皇使節 ジュゼッペ・ラザロット大司教

親愛なる皆様、

主のご降誕をまもなく迎えるにあたり、今まで多大な貢献をしてくださった御会の支援者の皆様に対し、心からのごあいさつとお祝いを申し上げます。

私はフランススコ教皇聖下の代理として、大きな喜びを持ってこのごあいさつを申し上げると共に、この機会に、皆様が聖地の貧しい子どもたちを支えるために続けておられる貢献に対し、衷心よりの感謝をお伝えできることを嬉しく思います。

今年は、「聖地のこどもを支える会」がNPO法人として認証されて10周年をお迎えになると伺っております。私も、御会理事長井上弘子氏および支援者の皆様と心をつなげてこの10周年記念を



お祝いさせていただきます。

多くの聖地の貧しい子どもたちが、より良い教育を受けられるキリスト教の学校に通うことができるよう、毎年、寛大な支援を続けてくださる皆様に、心から感謝いたします。皆様が始めて下さったこの活動は、助けを必要とする多くの家庭を支えることによって、この聖地における平和構築に具体的に貢献し、より良い将来への希望を与え続けてくれる、本当に大切な事業です。粘り強く援助を続けてくださる皆様に対し、賞賛の念を禁じ得ません。

ベツレヘムでお生まれになった幼子イエスも、優しい心と気遣いと保護の手を必要としていました。今日、温かいご支援を続けてくださる皆様は、マリアとヨセフが、イエスに対してなされたのと同じように、聖地の子どもたちに愛の手を差しのべてくださっているのです。

皆様のために心からお祈りいたします。主が皆様に祝福し、報いてくださいますように。

愛と感謝のうちに。

聖地の学校・学院のための連帯事務局長
クラウドディオ・マイナ

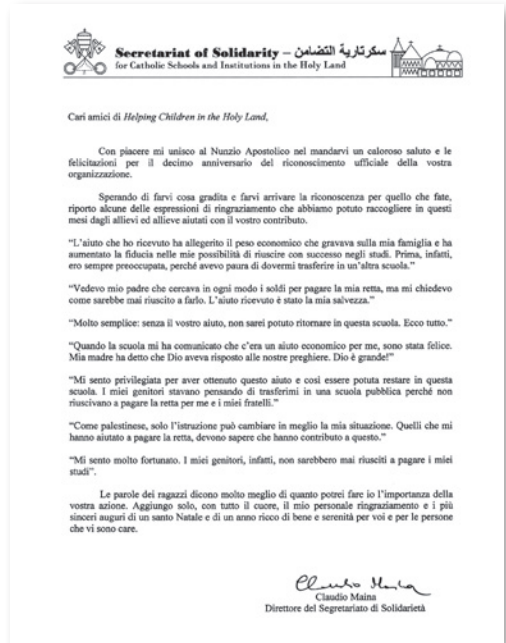


まず、援助して頂いている子どもたちのメッセージをいくつかお伝えします。「ただ一言。皆様の援助なしにはこの学校で勉強を続けることはできなかったでしょう。ありがとうございます！」

「学校の先生が、ぼくにも援助がもらえると教えて下さった時、本当に嬉しかったです。母は、神様が私たちの祈りに答えて下さったのだと言いました。神様は偉大です。」

「私はこの援助を頂いたおかげでこの学校に残ることができ、本当に恵まれていると思います。両親は、授業料を私のためにも、兄弟のためにも、払うことができなくて、私たちを公立学校に転校させようと考えていました。」

「教育だけがパレスチナ人としてのぼくの境遇を改善することができると思います。ぼくのために授業



料を援助して下さった方々、ありがとう！」

「ぼくは本当に恵まれていると思います。実際、両親は授業料をぼくのために払うことはできなかったでしょう。」

この子どもたちの言葉の方が、私が何を申し上げるより、皆様の活動がどれほど大切なものかをもっと適切に表しているでしょう。私はただ一言、心からの感謝の言葉を付け加えます。そして皆さまと愛する方々の上に聖なるご降誕の恵みと新しい年の平和とご多幸をお祈り申し上げます。

ヨハネパウロⅡ世財団理事長
イブラヒム・ファルタス神父

親愛なる皆様、

「聖地のこどもを支える会」がNPO法人として認証されてから10周年をお迎えになるとのこと、この喜びとお祝いの時を皆様とともに分かち合えることを嬉しく思います。

このメッセージをとおして、皆様が聖地の子どもを支えるために絶えず努力を続けてくださっていることを、私がどれほどありがたく思っているかをお伝えしたいと思います。子どもたちは、皆様の貴重な援助のおかげで、勉学を続ける機会を得、より良い将来を築くことができます。

私たちはこの数年間、実りある協力関係を培って来ました。この間、御会と理事長井上弘子さんは、イスラエルとパレスチナの若者たちの心に、対話と一致、相互の理解と尊敬の種を蒔くために、大変貢献なさいました。これこそ「平和の橋」を築くための貴重な道具です。

ですから、短い言葉ではありますが、御会のすべての会員、支援者、献身的に聖地のために働いてくださるすべての方々に、あらためて心からの敬意を表します。

まもなく聖なるクリスマスを迎えるにあたり、皆様とご家族のために、主の恵みと平和が豊かにありますように、心からお祈りいたします。



「小さな気づき」から NPO へ。 聖パウロ修道会・管区長 鈴木 信一神父

この活動の出発点は、イスラエル巡礼に行った日本人巡礼者の気づきにあると聞いたことがあります。外国人の目に映ったパレスチナの現実と課題、そしてそこで犠牲者となっている子どもたちの現実に気づき、彼らのために「自分たちに出来る何

かをしたい」という思いが、この活動の出発点だということです。

これはすばらしい話だと思いました。小さな気づきをうやむやにしないで、それを表現し、同士を募り、具体的な活動へと結びつけたのは凄いことです。はじめはささやかな支援活動だったと聞いています。それがさまざまな人たちの共感と支援を得て次第に大きくなり、遂には NPO 法人となって、10年の歩みをするまでになりました。最初から勘定すれば25年近い歩みです。

この歩みを最初から育て続けたのが現在の理事長の井上弘子さんです。この活動の今日までの歩みは、井上さん抜きには考えられません。彼女の惜しみない献身と情熱、そして彼女の行動力とパーソナリティが、NPO の活動をここまで育ててきたなと感じています。彼女を見ていると、ジョン・コッターの「変革の8段階」を思い浮かべます。組織を変革し成長させるためには「今やらねばという熱い情熱」と「断固とした意志」と「目的を実現するためのプロジェクト」が求められるというコッターの指摘を、井上さんは地でいっていると思うのです。

コッターは更に続けて、「この思いを、組織のリーダーたちだけで共有するのではなく、組織に属する全員と共有すること」の大切さを説いています。「思いを共有すること」は容易ではありません。それはすべての組織が抱える難題です。だからこそこの壁を乗り越えて、より多くの人を巻き込む活動へと発展してほしいと心から願っています。この活動は未来の主人公である子どもたちや青年たちの現在と将来に深く関わっています。それは彼らの幸せに直結し、中東の平和と、世界の平和につながっています。

継続は力です！

このすばらしい活動のますますの発展を心からお祈り申し上げます。

鈴木信一神父 1988年「聖地のこどもを支える会」発足当時から継続して諸活動のアドバイザーとして、また精神的にも役員、スタッフを支えてくださっている。2005、2007、2009年のプロジェクトには、スタッフの一人として参加いただいた。

NPO認証10周年おめでとうございます。

佐多 保彦 (当法人監事 株式会社TKB)

私と井上弘子さんのご縁について書かせて頂く失礼をお許し下さい。

私は、忘れ去られていた長崎浦上天主堂の被爆マリア像を教会内に戻すという、不思議な経験を致しましたが*1、その活動が元オランダ首相のアンドレアス・ヴァン・アクト氏に知られることとなり、詳細は別として結果はなんとベツレヘムにあるベツレヘム大学*2(ラ・サール修道会が運営)の国際理事にさせられてしまいました。何をすればよいのかよくわかりませんでした。とにかく大学の発展、そしてベツレヘム、パレスチナの発展に貢献して欲しいと言われ、年2回(1月と6月)ですが、ローマのバチカンのそばで開催される理事会に2002年6月以降、年に1度は努力して出席しております。

このお役目を引き受けた当初ですが、日本人の皆様にもご支援頂きたいと、日本のラ・サール会本部修道院(当時は日野市にありましたが現在は仙台市にあります)に大友成彦修道士(元鹿児島ラ・サール中学・高等学校長)を訪ね、いろいろ

とアドバイスを頂きました。大友先生から一度会われてはどうですかとご紹介された方のお一人が、井上弘子さんだったのです。

井上さんは、真に俗界に居られる Sister の様なお方で、世界平和や Holy Land に住む人々の幸せを願う活動で、彼女以上に熱心なお方を私は知りません。資金集めでは大変なご苦勞をされていますが、いつも明るく、楽観的に乗り切って行かれるお力に敬服です。真に神様のお守りの中にあるお方と感じます。私は「聖地のこどもを支える会」の監事を井上さんから計らずも依頼され、お引き受けしておりますが、年に1回書類に印を押す位のお手伝いしか出来ておらず、大変心苦しい思いをしております。私自身医療業界での本業をはじめ、ベツレヘム大学関係以外にもいくつかのボランティア活動に取り組んでおります事もあり、ご理解頂ければ幸いです。

井上様はじめ、皆さまのご健勝と益々のご活躍を祈念申し上げます。

*1 <http://www.madonnagasaki.org/>*2 <http://www.bethlehem.edu/>

ニュースレター「オリーブの木」新旧。No.18 (2006年2月)と最新 No.49号 (2013年8月)。



2005年、長崎。第1回のプロジェクトで、原爆忌60年のNHK特集番組「平和の巡礼」に出演。インタビューを受けるイブラヒム神父と参加者たち。

NPO認証10周年に寄せて

当NPO法人 前理事 石黒 朝香

「聖地のこどもを支える会」が NPO として認証されて 10 周年を迎えられましたこと、お喜び申し上げます。これも、ひとえに支援者の皆さまの日々のお力添えの賜物と存じます。

私は、2005 年より、初めてのプロジェクト参加者の一人としてかわり始めたので、10 年間の大部分である 8 年間で過ごさせて頂いたことになり（このように振り返るとなんだか知ったかぶった気持ちになってしまいますが）。最初に実施された「平和をつくる子ども交流プロジェクト」の日本人参加者はたった 7 名、イスラエル・パレスチナからは 4 名ずつでした。しかし人数こそ少なくとも、東京、広島、長崎から、そしてイスラエル・パレスチナから、それぞれ集まった学生の個性は非常に豊かで、私にとっては平和、家族、将来など、とにかく何でも話し合うことができ、心の底から向き合える、そんなかけがえのない仲間だったように思います。

その後、プロジェクトやスタディー・ツアーが実施されるごとに参加学生の輪は広がり、正確な人数は分かりませんが、現在では 3 カ国合わせて延べ 200 人名程度まで膨らんでいるのではないかと推測しています。参加学生の中には、高校生で参加したことが、その後の進路に大きな影響を与えたり、紛争の現場を肌で感じた日本人大学生が



2007 年のプロジェクト参加者たち。後列右端が石黒朝香さん。

その経験を大学生活に活かしたり、卒業後も関連分野で活躍したりしているケースは少なくありません。国際協力を目的とする他学生団体に比べれば規模は小さいですが、学生の多様性は劣らないと確信しています。

そんな後輩学生たちに負けるまいと、私も今年から米国に留学することを決意しました。イスラエルの同盟国という背景から、米国社会の中東紛争への関心は、日本とは少々異なる形で、非常に高いということを感じています。この地で学ぶことができる機会に感謝して、さらに成長してイスラエル・パレスチナ和平に貢献できる次の 10 年となるよう、努力していきたいと思えます。

2005 年の第 1 回「平和をつくる子ども交流プロジェクト」に高校生として参加。以後数回のプロジェクトやスタディー・ツアーにリーダーとして参加した。2010 年から 2012 年度まで当法人の理事。現在「紛争解決学」を修めるべく、アメリカの大学院に在学中。



2012年クリスマス。エルサレム・ノートルダムセンターで懐かしい仲間たちと再会。



NPO10周年のために贈られた花束。2005年から11年までプロジェクトに参加した横山雄一さんから。

今年も実施しました！

ISRAEL — PALESTINE — JAPAN

平和の架け橋 PROJECT 2013

in 東北

2013年もたくさんの実りがあった“平和の架け橋”プロジェクト。前号の速報に続き、あらましと参加者の感想をお伝えします。



大槌ベーススタッフとプロジェクト参加者。

プロジェクトのあらまし

「平和の架け橋プロジェクトin東北」は、今年も岩手県大槌町でのボランティア活動でスタートしました。3度目になる今回も、たとえ小さなことしかできなくても、心の絆があるということを感じて頂きたかったからです。イスラエル、パレスチナから各4人、日本から8人の若者たちとスタッフ11人が、8月5日から11日まで大槌町で共同生活をし、若者たちはその後12日から16日まで、JICA東京国際センターで「対話と分かち合い」および報告会をしました。

大槌町に到着した翌日は、ボランティア活動を開始する準備として、被災者の体験談を聴き、被災状況を見学する一日としました。参加者が大地震と津波の恐ろしさを実感したのは、尺八奏者の大久保正人氏の生々しい体験談を聴き、また津波のビデオを見た時でした。巨大な津波が人々や車、民家などを飲み込んでいく様子に、強烈なショックを受け、涙が止まらない者もいました。と同時に、愛する家族を失い、家を流されてもなお、「人のいのちの尊さ」「生きることの意味」を模索し続け、前に進むようとしておられる大久保氏の生き方は、被災し傷ついた人々とどんな心で接したらいいのかと不安を抱いていた若者たちにとって、ボランティア活動の素晴らしい準備となりました。

カリタスジャパン大槌ベースのスタッフの方が準備してくれた活動は、大きく分けて、仮設住宅の訪問、学童保育支援、海岸や墓地などの清掃の3つ

でした。

未だに不自由な住宅仮設で生活を続ける被災者を訪ねて、そうめんを味わう昼食や、足湯などを用意した「お茶っこサロン」は、被災者と若者たちとの温かな交わりの場でした。言葉が通じなくても、足湯・マッサージなどのスキンシップや涙と笑顔で互いの気持ちを通じ合わせていました。

今年は学童保育支援で、子どもたちとの交わりを実現できました。大人の被災者の話を聞くボランティアはたくさんいても、子どもたちの心のケアをする人が少ないというので、彼らと接する機会を欲しいと思ったのです。6歳から10歳までの子どもたち20人くらいが2日間にわたって学校の1室に集まり、イスラエルやパレスチナや日本から来た「お兄ちゃん」「お姉ちゃん」たちと、お絵かき、風船やうちわなどを使った工作、スイカ割りなどで存分に楽しみました。

吉里吉里海岸の清掃作業は、盛岡市から来た大勢の高校生に混じってのボランティア活動でしたが、図らずも若者同士楽しい国際交流ができました。一方、大槌ベースの向かいの山の中腹にある墓地で草取りをした日は、ちょうどお盆とあって、お墓参りに来ていた住民が、外国の若者たちが墓地をすっかりきれいにしてくれたのを見て、とても感謝しておられました。

大槌町の皆さんとの「文化交流会」では、東北応援ソング「花は咲く」を日本語、英語、アラビア語、ヘブライ語で披露。そしてパレスチナ料理のシェフを中心に「不思議な味」を用意し、町民の皆さん

に喜んでもらえました。

イスラエル・パレスチナ・日本の若者グループがたった数日間の滞在で被災地のためにできたことは、ほんのわずかなことでした。しかし、大槌町は2回目ということもあって、町の方々との交わりはもう一歩深くなった感があります。

2005年からの「平和の架け橋」プロジェクトが目的としているのは「平和をつくる」ことです。それは、相手を自分と同じ「人間」として共感し、受け止める、そして隣人としての絆を築く喜びを味わうことです。2週間あまりの活動でこのことを体験した若者たちの心には、確実に「平和の種」が蒔かれたと信じています。

別れ際に、若者たちから「イスラエル人もパレスチナ人も、そして被災地の人々も、みんな同じ人間だ」「僕は、パレスチナから友だちを連れて再び大槌町に戻ってくる」「これからは平和をつくるために働きたい」などの感想が聞かれました。彼らにとってこのプロジェクトは、これからの生き方や考え方に大きな影響を与える体験だったのです。中でも今回、実行委員として、また現場でのリーダーとして主旨をよく理解し、力を尽くしてくれた若者たちの成長を、これからも楽しみに見守りたいと思います。

**大槌町でのボランティア活動は、
参加した若者たちに強い印象を残しました。**

イゴール・セミオノフ (イスラエル)

大槌町に着くまで私は、被災者とともに活動をするのが気が滅入り、憂鬱なものになるかもしれないと考えていた。しかし驚いたことにそれは実際には全く逆であった。

プロジェクトの初日の大久保正人さん(尺八奏者)のお話で、私はプロジェクトの活動をすぐに始めようという気持ちになった。彼は私が想像していたのとは全く違って、悲しみに沈んだ、うつろな様子ではなく、人生と音楽への情熱に満ちていた。大久保さんが震災当日の様子を、勇気を持って話してくれたことで、私は彼の衝撃的な話を理解することができた。また彼の、震災から学び、前へ進むという姿勢、また自然が彼の故郷にした仕打

ちにもかかわらず、以前より震災と自然を結びつけて考えようとする姿勢に、感銘を受けた。

大槌町の人々と交流する日々を過ごしていくうちに、いかに今自分が持っているもの、当然のように思っているさまざまな事に感謝していないか実感した。私はこれから絶対に、友人や家族にどれだけ愛しているか、感謝しているのかを伝えるようにしたい。なぜなら、さよならを言うことも、自分がしてしまった何かを謝ることも、今までどれだけその人を愛していて、これからも愛し続けると伝えることもできず、全てのものは一瞬のうちに奪われ得るということ学んだからだ。

川野由起 (日本)

私は東京に住んで、2年半の間別段の不自由もなく生活を送っていた。先学期、大学の授業で、教授が夕日とブルドーザー、海が写った写真を見せて、「この写真のタイトルをあてて見なさい」と言った。誰も「復興」という正解を答えられなかった。この時に私は、震災は「自分の問題」ではなく「他人事」だと勝手に解釈していたことに衝撃を受けた。これがこのプロジェクトに参加した一つの大きなモチベーションになった。

ダナ・アラミ (パレスチナ)

大槌町の仮設住宅を訪問した際、本当に衝撃的な出来事が起きた。私が盲目の女性の手をマッサージしていると、彼女は私の手を握り、こう言ったのだ。「あなたの手は、まるで津波で亡くなった私の孫の手のようなね。孫が生き返ったみたいだよ。」それは私が今まで聞いた言葉の中で最も悲しく、しかし最高の言葉だった。私は彼女を幸せにし、おばあさんの心の中の望みを失った部分を生き返らせたのだ。被災者の方は仮設住宅で暮らし、私たちはそこに一時的にしか滞在していない。しかし、私たちが被災者にもたらすことのできた笑顔は一時的なものではなく、永遠に続く事を望んでいる。

海老原仁美

常に考えていたことは、私に何ができるのか、ということだった。被災地を訪れるまでは、被災者

の方に寄り添ってお話を伺い、少しでも支えになれるよう努めることが、主な私たちの役目だと考えていた。助けになりたいと思っている人間の存在を伝え、精神的な支えになることが出来れば、それだけでも意義のあることだと。今でもそれが間違いだとは思っていない。しかし、実際に被災者の方とお会いしてお話をしたり、子どもたちと遊んだりするうちに、自分の存在意義について疑問を感じるようになっていった。

お会いした方は皆、訪れた私たちに、温かい笑顔で接してくださった。しかし、何か言葉を返そうと思うものの、共通の経験がなく、全く異なる環境で生活している私の口から出る言葉は全て薄っぺらで無責任な言葉になってしまいそうで、ただただ頷くことしかできなかった。東京からやってきた一介の学生は、少しでも被災者の方の役に立てたのだろうか。そもそも少しでも役に立とうと思う事自体が傲慢なのではないだろうか。被災地での私の存在意義とはなんだったのだろうか。今でも、明確な答えは出ていない。

活動の中で被災地に思いを馳せながら、イスラエルとパレスチナ両民族の紛争に対する考え方を深めました。

ロニ・ビタン (イスラエル)

大槌町での一週間はあっという間に過ぎ、東京へ移動する時がやってきた。私はわくわくすると同時に不安だった。というのも、東京では、自分を含め人々が常に避ける話題に関して議論することになっていると知っていたからだ。正直なところ、私はプロジェクト開始前から少し心配だった。何と言っても、2週間もパレスチナ人と一緒に生活すること(しかも日本で!)は、私にとって普通のことではなかった。以前は、なぜこのプロジェクトに参加したのかと尋ねられても、明確に答えられなかった。しかし今では自信を持って言うことができる、後悔はないと! 私は皆と友人となり、彼らの生



大槌町での交流イベントで、中東の伝統的ダンス(ダブカ)を踊るイスラエル、パレスチナの参加者。

活について耳を傾けた。彼らは私に彼ら自身の不安や恐れについて話してくれ、私はそうした彼らに敬意を抱いた。今後も私の生活はプロジェクトと同じように続き、私は1年後には兵役に就く。そして、今でも私は母国イスラエルに仕えることを誇りに思っている。しかし今では、場合によって、特に人との交流が求められる場合では、確実に今までと違った行動を取るだろう。要するに、私たちは皆、例外なく、人間なのだ。

ファディ・ランティシ (パレスチナ)

プロジェクトを通して、参加者の間に経験したことがない人間関係が形作られた。私は常に、敵と人間関係を持つことを拒否してきた。しかし、今回はつながりができた。なぜなら、人間性が不寛容と愛国心を克服したからだ。例えば、ロニというイスラエル人の女の子と政治的な事柄について議論したのだが、議論は礼儀正しく、敬意を持ってお互いの視点を受け入れながら行われ、平和的に有益な議論をすることができた。過去を後ろ向きに振り返ることも、未来を破壊することも、世代から世代へ憎悪を引き継ぐこともなく。

私が学んだ最も重要な事は、あらゆる違いにかかわらず他者を受け入れることだ。2009年にこのプログラムに初めて参加した時から4年の年月を経て、ここまで辿り着いた。2009年には、私は非常に不寛容だったのだが、おそらくそれは、イスラエル人と交流し話をすることが初めてだったからだろう。それから4年経った今、私たちは友人となり、また今やパレスチナ・イスラエル間の紛争は世界最大

の問題ではなく、最も小さな問題なのかもしれない気がついた。

井上緑 (日本)

このプロジェクトに参加した一番の理由は、大学で中東問題を扱ったゼミナールをとっていたため、パレスチナとイスラエルの学生が集まるという機会を活かしたかったからである。つまり、現地で起きていることを直接知っている彼らの本当の思いを聞いてみたいと思ったので、応募した。正直なところ、当初は東日本大震災が起こった土地でボランティア活動をするという目的は二次的なもののように感じていた。しかし、実際にボランティア活動をするなかで、東北で今起きている困難と遠い中東のある地域で起きていることには、いくつかの共通する問題(「故郷」を奪われること、親しい人を「喪失」することなど)を見いだすことができた。たとえ両国に地理的距離が存在するとしても、お互いに抱えている問題の根本や、それに立ち向かおうとする人間の努力、相手のことを思いやる人間の良い性質はあらゆる場所、あらゆる時代で普遍的だと、困難な状況を生きる人たちからその体験を直接聞くことで、身に沁みて分かった。

そして震災を乗り越えようとする方々の姿勢、ともに歩み寄ろうとするパレスチナ・イスラエルの学生の姿勢、それを応援する日本人学生とスタッフの方々から、前向きな気持ちで現状を少しずつでも改善していく大切さや、その「人間的な力」を学ばせて頂いた。

松本直樹 (日本)

イスラエル人、パレスチナ人と共同生活の中で、特にシェアリングをとおして、彼らの深い深い思いのほんの一握りを理解することができた。イスラエル、パレスチナの参加者がゆっくり静かに話をし始めると、私たちは静かにただ聞いた。何ら質問せず、ただ淡々と聞いただけではあったが、2週間、共に過ごした彼ら全員が何らかの被害者であることが分かり、ニュースや新聞で読む、イスラ



大槌町の交流イベントでのパレスチナ料理ビュッフェ。同行取材の山内神父(画面右)も大活躍。

エル・パレスチナ問題ではなく、日本人である私たちも当事者としての問題ととらえなくてはならないと考えるようになった。人が傷つけあわないようにするには、長くそして多くの努力が必要ではある。しかし、友達が被害を受けているのであれば、その努力は惜しまないものだ。そして、今回のプロジェクト中に1つの出会いから、私は大きな事実をすっかり忘れていたことに気がついた。

学童保育へ行った時のことだ、終わり頃、お兄さんお姉さんがイスラエル・パレスチナという戦争をしている国から来たかと自己紹介すると、とある女の子が——みんなは作業をしていたのだが——その子は作業そっちのけで、私に「戦争って何?」と尋ねてきた。戦争が何であるかを説明すると、彼女は続けざまに「その戦争は、今日も、昨日も、明日もあるの?」と聞いてきた。その後も彼女からたくさん質問があった。戦争の目的はなにか、戦争がどうなれば負けるのか、そしてどうして戦争が始まるのか、などだ。そして質問に答えると、彼女は一言「悲しい」といった。私はその言葉に驚いた。

彼女は、戦争が存在することは世の中に異様なものが存在することだと考えている。しかし、私たちは、その異様なものが存在することを、あたかも自然と受けとめている。私たちが異様な状態にある事に気付かされた。彼女は、戦争とは存在してはならないものと、とらえていた。紛争解決を将来的に目指す私にとっては、それこそが原点であったにもかかわらず、その原点をすっかり忘れてしまっていたことに気がついた。利害や政治的なものが戦争に絡んでいることは事実であるが、そこをすっ飛ばしても人と人がなぐり合う、殺し合っ

ていることは異常だ。だからこそ紛争解決がしたいのだ。

彼女との出会いが原点回帰となってくれたことで、将来の夢を明確に思い返せた。プロジェクトに参加し2年目、そろそろ本格的に紛争解決へのアプローチを試みたいと思う。

ナディア・タドロス (パレスチナ)

正直に言うと私は「希望」を長い間失っていました。その理由の一つとして、強制的に強いられている、誰もコントロールできないルーティーンから抜け出せないでいたからです。しかし、初めて来た日本で、初めて「自由」というチャンスを得て、そこから飛び立つことが出来ました。私が学んだのは、平和を経験した事がなければ、平和を創る事はできないということです。私に課された使命は、まだ飛び立つことができていない人々に、私が持

つことができたような翼を渡していくことです。平和を経験できたと言えるのは、イスラエルの参加者と私との間にある壁を壊すことを私自身ができたからです。彼らはもう、おかしな人や見知らぬ人ではありませんし、私は自分と反対の立場から見た物語を知る準備はできています。



砂浜清掃のボランティア作業。暑かった。(吉里吉里海岸)

追悼 梅津明生神父様

去る8月28日、梅津明生神父様（カトリック仙台司教区、司教総代理）が神様のもとに召されました。「聖地のこどもを支える会」を発足当時から支えてくださった方です。

また神父様には、教育支援活動のきっかけとなった、「道の会」巡礼の同行司祭として、何度もご助力頂きました。支援者の中には、神父様とともに巡礼の道を歩まれ、心温まる思い出をお持ちの方が数多くおられます。

神父様はカトリック仙台教区の司祭として、宣教と司牧と奉仕の使命に生涯をかけられました。また幼児教育や福祉の分野でも大きな貢献をされました。

日頃から「平和」に関心を持っておられ、「平和の架け橋in東北」プロジェクトにも賛同いただ



イスラエル・パレスチナのおみやげ「シャローム」の皿を持って。
(2012年大槌ベース)

き、スタッフとしても大活躍されました。2011年夏、震災から間もない塩釜でのプロジェクト、また翌年の大槌町での活動は、神父様の協力無しには実現しなかったでしょう。残念ながら今年には入院されていたため、病床から祈りの参加となりました。

8月19日、プログラム最終日に、東北で3年めのプロジェクト

が無事に終わったことをご報告しました。「よかったね。よかったね。」「私は大丈夫だよ。神様が一緒だから。」それが私と神父様との最後の会話となりました。

永遠の安らぎに入られた神父様に、心からの感謝を申し上げます。

NPO法人 聖地のこどもを支える会
理事長 井上弘子、役員一同



パレスチナ人の町、ヘブロン旧市街。ユダヤ人入植地があるため、高台にはイスラエル軍の監視の塔が。

学校にて

当法人が支援を続けている学校の生徒たちです。友だちと一緒に、みんないい笑顔。出会えてよかったね！



聖ヨゼフ学院にて。(エルサレム)



ハンド・イン・ハンド学院にて。(エルサレム)



町で出会った子どもたち



上 ヘブロンにて。
左 デヘイシャ難民キャンプにて。(ベツレヘム)



飼い葉桶乳児院の元気な子どもたち(名誉殺人を免れた)。(ベツレヘム)